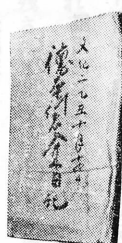


資料探訪

徳本行者入来日記について――



滋賀県日野町信

楽院に襲蔵せられる同書は、美濃紙袋綴、十九紙の短篇であつて、表紙の中央に前記の標題を大書し、その右側に文化二乙丑十月十四日と一行に稍小字で書き、裏表紙の中部以下に信楽院、執事、本竜記と三行に大書せられている。内表紙には徳本上人御入来記録とし、右側の日付けは表紙と同様であるが、左下に本阿史と記されている。これ等によつて先ず考えられることは、本阿の稿本を本竜が浄書した、澄禅上人の旧蹟平子山を中心とする湖南地区行化の唯一の記録である。肩書の文化二乙丑冬十月十四日の日付は、徳本上人がこの地に第一歩を印せられた記念すべき日とし、永く伝えんとして特記したものである。上人の逗留は翌年正月九日までであつて

その間の詳細が伝えられているが、その教化の行動範囲は左の如くである。

十四日平子山入山、十五日山麓の部落にある地藏堂で諸人の結縁、十九日綿向嶽登山、綿向山は鈴鹿連峰中の高峯で、馬見岡綿向神社（日野町村井）の奥宮が鎮座するので、明神に法楽を捧げたのである。十月二十九日下山して信楽院に入り、翌月五日迄諸人に結縁同夜は同町中井源左衛門宅で別時を修した。同家の祖は澄禅上人江戸掛錫の外護者として

仏縁深く、特に上人の平子山招請についても「仕送役元締中井源左衛門御入用の品々御普御望の通壺人にて御供養可申候間何れにも被仰候様」と申出でた篤信の日野豪商である。翌六日甲賀地区に趣き、岩室大福寺、瀧称名寺に着き、七八両日は昼夜別時、九日午後岩室大福寺着、十一日迄教誡の法筵が開かれた。十一日午後同寺発、大野若王寺を過ぎ、

夜に入つて日野塗師町脇村七左衛門の亡妻に回向し、松尾村佐久右衛門宅に入り、一夜別時を修した。十二日午後途中仁本本常福寺に立寄り、快の和尚の満中陰回顧をなして、平子に帰庵せられた。

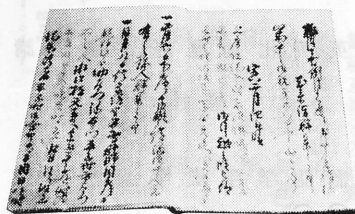
翌年正月四日、「早春より越前辺へ御引越し」の内意が伝えられたが、上人においては予定せられていたところであつたのか、六日には御暇結縁十念があり、九日平子村を発ち水口松元寺に向われたので、遽しきなかに上人の日野行化の旅は終つたが、信者に与えた教化の蹟は、徳本講、専称講として、村落に伝える名号石には四季花を絶たず、その遺跡は澄禅庵（今は澄禅寺）として、六丁余の山上幽邃の地に残る。

本書は上人行化の蹟を伝える主要部分に対して、縁起とも称すべき部分があつて、初めに上人の招請について、「文化二丑閏八月の

伊藤 真 徹

頃御隨身本戒師入来、徳本行者事先年御当地へ被參結縁有之候之処、当御丈室前始一統様御請戴被成候て平子山へ住山御頼被成候処、行者承引被成候て参り可申由に御座候、瑞花庵再建出来次第と被申、今般弥普請出来致し候哉、且委細に御相談致し可申由、依之今般參上候」との口上が書付けられている。これによつて知られる

点は、文化二年の秋には上人は勝尾山に在住せられたこと、日野が上人曾ての遊化の土地であること、この時澄禅上人止住念仏の地平子山に招請して内諾を得たこと、その実現は瑞花庵（平子の部落の中にある）再建後とすること、その懇請者は信楽院住職を含む篤信者グループであること、又上人の常随弟子中に本戒のあつたこと等である。但しこの交渉は全く思ひ懸けぬところであつて、当地の人々は上人は、「兩三年御化行無之由」の風聞と、「仁正寺伊惣右衛門勝王へ參詣の砌も、



（上人平子山住山記録の一部）

大師前六百年者六七年も有之候得共、右御恩（遠力）忌迄は禁足行道行御勤被成候由」との親聞の流布は、「依之同行共力を失ひ、御普（請）義云何可仕哉と種々愁情仕、右故普請も出来不仕候」と云う実情にあつたのである。実情は如何にあれ「不遠上人入来被成下候様、重々忝奉存候」との信者の歓喜は、役所の正式認可を待たず、「内々は御上にも御承知に候間、何分造作仕可申」と事業は取計われた。九月二日日本戒和尚の下検分、続いて「九月十四日の頃、塗師町藤八勝王へ被參候処、来る十月十日頃発足にて其方へ参り可申由に被仰候間、左様御承引被下候由」の快報は、あらゆる障壁を突破して事業を遂行し「弥十四日平子へ御越しに相成」との確定による準備は、「其夜中に圓茅野（平子山の地名）古庵疊立具等致し候様申、町人足平子熊野人足にて経師大王等段々十三日より参り、人足仕立見分役本町善兵衛、講中世話方等参、夜通しに大方出来、道具追々に相送り、金兵衛善兵衛又日野へ返り、十四日又参り山の世話出来」との記述は、上人の御入来に狂喜し、準備に奔走した篤信者の熱誠が偲ばれて有難い。

その後の上人は松元寺で一日一夜念仏、十

日別所遊心庵で二夜三日の別時後、湖上の水路により十六日越前敦賀原村西福寺に安着せられた。この地まで扈從した熊野助左衛門、平子市右衛、日野藤八、同忠助は正月二十三日帰郷している。

出迎えに僧俗の代表が派遣せられていることも同様であつて、高德巡化の一端が知られると共に、徳本行者伝を補うに足る有力資料である。

（教授）

高 畠 寛 我 著（教授）

「Ratnamālāvadāna」

昭和27年刊 B・5
東京・東洋文庫
（研究室取扱）

塚 本 善 隆 著（講師）

「肇 論 研 究」

昭和30年刊 B・5
京都・法蔵館
（研究室取扱）